申込書記入日	平成　28　年　7　月　17　日

長野県佐久穂町コミュニティ創生事業プランコンテスト応募申込書

〔記載上の留意事項〕

１．下記の「応募上のご注意」を了解し、同意の上、記載してください。

２．本様式中の各項目に関し、記入しきれない場合、当該項目に「別記」と記入のうえ、任意の様式による記載をしていただいてかまいません。ただし、その場合であっても、本申込書と合わせて１０枚以内（Ａ４サイズ）での記載としてください。

１．応募者概要

法人・団体		個人			
ふりがな		ふりがな	ときだ　けいいちろう		
法人・団体名		氏名	常田　圭一郎		
ふりがな		性別	男	年齢	
代表者氏名					
共通					
所在地（住所）					
電話番号		FAX番号	－　　－		
E-mail					

※ご記入いただいた個人情報は、本コンテストの実施のために利用いたしますので、法令に定めのある場合やご本人が同意している場合を除き、目的外利用することや第三者に提供することはありません。

【応募上のご注意】

・応募書類は返却しません。控えなどは応募者において対応して下さい。
・審査内容の詳細・結果に関するお問合せには一切お答えできません。
・本コンテストへの参加は無料です。ただし、調査費、通信費及びその他応募に係る一切の費用は応募者負担となります。
・使用言語は日本語とします。
・提案に当たっては個人等を中傷する表現は避けて下さい。
・応募資格に対する虚偽の事実や募集要項に対する違反があった場合には、失格や取消とする場合があります。
・知的財産権及び事業プランの取り扱いについて、募集要項に記載された事項をあらかじめご理解いただいた上で、応募して下さい。

２．事業プラン

（１）事業プラン名
中学生のインターンシップ　～いつか大きくなって帰ってきなよ～
（２）事業目的（該当するものに〇をつけてください）
①　人口が減りつつある集落で、集落機能の維持ができるようになるための事業プラン ②　地域の多様な人材を活用しながら、生活を支える仕組みができるようになるための事業プラン ③　地域ぐるみで、子育て支援を進める仕組みができるようになるための事業プラン
（３）事業プランの概要・説明 ※事業目的、事業の内容、ターゲットなど
【やりたい事の概要】 少人数でも集落機能を維持するために、問題を解決できる実行力とリーダーシップを持ち、佐久穂町に愛着のある人材を育てる。佐久穂町で実現したい事や、やりたい事が明確なクリエイティブな若者が佐久穂町に戻ってくることを助ける事業を展開する。 【問題解決方法】 高校や大学、社会人で町を離れた人材が、知識と実力を備えて佐久穂町に戻ってくる。 佐久穂町にある資源、特産品、地形、風土といった材料を若い年代（中学生）に教えることで、将来に佐久穂町で実現したい仕事・作りたい物をイメージさせる材料を提供する。この材料を基に、成果物のビジョンを描く若者が、進学や就職で一時は町を離れたとしても、知識と実力を備えて佐久穂町に戻ってくることで、少人数であっても集落機能を維持していく。 【手段】 佐久穂町の企業と中学生が交流することで、佐久穂町には働く場所があり、将来の自分の生活基盤を作ることが出来ることをまず認識してもらう。その上で、佐久穂町の企業が扱う資材や特産品として何があるのか、どんな付加価値を付けるているかを認識してもらう。更に、働く社員の人物像、能力、あるいは仕事とライフスタイルのバランスを体感してもらう。 その後の高校、大学でどういった進路を選ぶかは個々人によるが、佐久穂町の魅力が浸透していれば、自身のやりたい事のために準備を整えた人材が戻るだろう。また、戻る予定の無い人であっても、町の資源や材料の活用を思いついたり、仕事のライフスタイルを求めて戻るかもしれない。彼らは実力と情熱を持った若者として佐久穂町に貢献する人材となる。 【ターゲット】 佐久穂中学校の生徒 【背景】 転出者アンケート報告書によると、転出者の56.9%が佐久穂町に住んでいたいと考えているのに、佐久穂町に戻ってくる若者が少ない（これはデータが無いので知人友人からのヒアリングであるが）ことに、何かギャップがあると考えた。このギャップは佐久穂町の有利な点に気付く事が遅いために、やりたい事への準備に時間をかけられなかったり、利益性の問題から具体化を諦めてしまうと考えた。 今回、少人数でも集落の機能維持できるのは、実行力や他者を巻き込む力が大きく、かつ、佐久穂町に愛のある人材だと考える。この両輪を保持する人材は町の外や、ましてや県外にいることはなく、今いる子供を育成して、一時は町の外に出たとしても、大きな実力を備えて戻る思考をやしなう事が必要と考えた。 今の世に溢れるイメージ⇒田舎に帰る人＝都会での仕事や私事のつらい事に挫折して逃げ帰る？（こんな人が集まっても集落機能に積極的に参加していくとは思えない） 佐久穂町のイメージ⇒田舎に帰る人＝田舎で実現したい事がある（こういう人こそ集落機能にも力を注げるパワーがある）

（４）事業プランの審査基準との適合性
①事業効果 効果を定量的に計測しても、数値として現れるのは少なくとも10年はかかるかもしれない。しかし、本事業を行うことで副次効果が見込めると考える。 直近の副次効果として、中学インターンシップという佐久地方では無い取り組みを行うことで、近年始まった小中一貫教育とも相まって、教育を目当てに人口の流入がありうる。 「町に戻る」という本来の目的が達成されれば、大きな副次効果が見込めると考える。例えば社会人を数年経験して戻るのであれば、個人1人の移動だけには留まらず、家族、財産、業界のノウハウ、他企業との繋がり、社会人時代の友好関係も一緒に付いてくる。
②地域性 佐久穂町の企業にインターンシップに行くため、地域と密接につながった事業と言える。また、一般の企業だけでなく、行政が管轄する施設をインターンシップ先にする事も可能だと考えている。実行初期段階では、一般企業よりも行政管轄施設の方が実現性が高いかもしれない。 なお、ここで聞かれている地域性とは毛色が異なるかもしれないが、仕事とのライフスタイルを提示することも重要だと考える。佐久穂町という地域で働く人のライフサイクルが示すことが出来れば、より効果は高いと考える。
③実現可能性 一般の企業に協力してもらう幅が大きい。安全面では特段の注意をする必要がある。また、会社見学ではなくインターンシップと銘打っていることから、業務を一緒に行うことを想定しており、企業側にも学生にもある程度の人間としてのレベルが必要だと考える。中学生全員を対象にせず、夏休みに希望者限定といった振り分けが必要かと考える。 行政は企業と学校の橋渡しとして存在する認識である。行政・企業・学校・家庭の準備や責任の明確な境界を示す必要がある。初年度は準備・実行・評価に時間を要すると思うが、次年度からは企業が同じであれば、子供が変わるだけになるので、ルーティン化できると考える。
④新規性・独創性 中学生のインターンシップに新規制は無い。ただ、企業の地域貢献とか、中学生の人間的な成長ではなく、町の将来を担う（町に戻ってきてもらう）人材を育成するという目的に独自性はあると考える。 話は少しそれるが、インターンシップというキーワードだけであれば、廃校を使用した出張インターンシップをやりたい企業がいると考える。ただ、町以外の企業を呼んだところで、廃校利用や人の集客にはなっても、町に貢献する人材の確保には至らないと考えた。